かささぎ 通信 第59号

2017年 8月 23日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年七月二十一日（金）、八月四日（金）二回にわたって「森三郎の作品を読む会」番外編として、「ローズ・ファイルマン Rose Fyleman の作品を読む会」を開きました。

森三郎には『赤い鳥』昭和6（一九三一）年11月号初出の「かうもり傘」という童話があります。市場で卵を売っていたおかみさんが忘れられていた傘を拾うと、不思議な出来事に遭遇する話です。実はこの傘は魔法使いのおじいさんの傘で、1から3まで数えた場合、5まで数えた場合、7まで数えた場合にそれぞれ魔法の力を発揮するのです。

「森三郎刈谷市民の会」では二〇一七年の森三郎童話新作紙芝居として、この「かうもり傘」を選びました。この「かうもり傘」には、イギリスの女性作家ローズ・ファイルマン（一八七七～一九五七）の「The Magic Umbrella」（一九二二）という原話があります。（参照：森三郎刈谷市民の会会誌『かささぎ』創刊号「森三郎とローズ・ファイルマン」神谷磨利子）

森三郎は『赤い鳥』の中に他にも「赤いポスト」「つむじ風」というファイルマンの原話からの再話を発表しています。そこでファイルマンの原話を原文で読みながら、森三郎作品をもう一度読んでみようということになりました。

当日は鈴木哲さん（「森三郎刈谷市民の会」会員、桜花学園大学学芸学部英語科非常勤講師）を中心に、鈴木さんの友人 David Dykes さん（四日市大学英語教員）、山田さつきさん（日本福祉大学英語教員）にも参加していただき、悪戦苦闘しながらも楽しい会になりました。

紙芝居の脚本を作る際に、五まで数える場合を、三郎童話では「三つ、四つ、五つと五へんかぞへると」と表現しているのが子どもたちに分かるか迷っていました。しかし Dykes さんは、「三までならthree↙で下がるが、五までの時はthreeで下がらない」と教えてくださいました。

さらに三郎童話では市場へたまごを買いに来るのは小さな女の子ですが、原話では A little boy です。その点に関して、「日本では男の子より、女の子がお使いに行くことの方が多かったからではないですか？」と Dykes さんから指摘があり、そう、そうと納得しました。森三郎の「沼」（『赤い鳥』昭和9年1月号初出）の中にも男の子がお使いに行くところを見られて、きまりが悪そうにする場面がありました。

さて三郎童話の「赤いポスト」（一九三一）には二つの話が入っています。一つ目はある四つ辻に十二年も立ちつくしていた赤いポストが、ある晩冒険をして町の探検に出かける話です。出し忘れた手紙を投函するように奥さんから言われたブラウンさんが、ポストがないことに気付くのですが、奥さんには信じてもらえません。二つ目の話は好奇心の強い森の妖女が、町の赤いポストをのぞいた時、郵便物と一緒にポストの中に落ちてしまう話です。これはファイルマンの原話では The Pillar-Box と The Fairy Who Fell into a Letter-Box（一九二三）という二つの別の話です。でも三郎童話ではどちらもある四つ辻のポストになっていて、一つのポストにまつわる話としたのだと分かります。

参加者からは、二つ目の妖精の話におもしろさを感じるという声が多く上がりました。イギリスのフェアリー・テイルズ（童話）の系統の話を、ファイルマンが発表した一九二二-二三年からわずか十年足らずで、二〇歳の森三郎が紹介していることに大変興味が湧きます。

また、森三郎がファイルマンの話の中から、ブラウンさん夫妻の滑稽なやり取りの話を選択したことも面白いことです。ユーモアの精神を大事にする森三郎の関心が、洋の東西を問わず広がっていたことを示すものと確認できました。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）

9月8日（金）午後1時半～3時半

①『赤い鳥』に掲載の森三郎作品を読み返します。

②「城下町」（『季刊 新児童文化』復刊一号、昭和二十一年八月）